

空襲と生活



闇市の様子

〈提供 曾根将博さん〉

昭和二〇年、東京大空襲

●阿佐谷北四丁目

阿部 政太郎

(明治四〇年生まれ)

昭和八年から同一九年までは阿佐谷南に居住しておりました。そのころの阿佐谷には田圃たんぼもあり蛭も飛んでおり、天祖神社境内には杉の巨木も立ち並び、正に杉並区にふさわしい静かな住宅地でした。勤務先は石川島造船所(佃島)で、朝六時ごろの電車に乗り有楽町下車、歩いて佃の渡し船に乗り七時二〇分まで入門でした。

日中戦争が勃発し、会社に入社させた弟が昭和一四年五月召集になり、九月山西省で戦死す。世の中次第に戦時色が濃くなり、昭和一六年一二月八日、太平洋戦争に突入。最初は大本営発表にて多大の損害を与え我が方損害軽微なりを信じていたが、次第に情勢が怪しくなり不利なことは一さい報道を禁止し、実情を知ることが出来なくなつた。物資は不足し、食糧・衣料・日用品等すべて配給制となり、何一つ自由に買えるものがなくなりました。戦後生まれの者には想像出来ないことかも知れません。

昭和一九年、軍需産業が徴用工を収用するため州崎遊廓を撤収し寮に改造、管理人に任命されて杉並から州崎へ移転し

た。戦争はますます不利となり、本土空襲も一段と烈しくなつて、輸送船が不足し徹夜・残業も強制的となり、立ったまま居眠りする程疲れ切っていた。工員の中から次々と召集で出征して行き、人手不足で街の呉服屋・文房具店等から徴用されて入社するが、頭数だけ揃えても能率は一向に上らず、前途に不安を感じずにはいられませんでした。不平・不満は口にするとは非国民扱いにされ、軍の命令に従うほかどうにもなりませんでした。

昭和二〇年に入って空襲はますます烈しくなり、長男が入学期になつたが東陽小学校も疎開で閉鎖となり、家族を田舎(秋田)へ疎開させるべく、二月ごろから荷物を纏まとめて送る積りで荷造りし両国駅に申し込んだが、一か月後にならないと受付けられないとの事でした。昭和二〇年三月九日夜一時ごろ空襲警報が鳴りB29が飛来、浅草・本所方面に火の手が上り、やがて木場方面に焼夷弾が落下、ものすごい突風が吹き街全体が火の海となり、一〇日午前一時ごろ州崎も街全体が焰ほのにつつまれた。備え付けの防空壕(州崎は〇メートル

地帯だから地下防空壕は出来ない)は半地下の土盛りであり、町内警備員が盛んに防空壕退避を呼びかけるので、安全地帯に避難するひまもなく家族五人(子供三人)が防空壕に退避したが、突風で入口の扉が開き火の粉が入って来る。用意したバケツの水も使い果たし、目の前にある会社支給の用水槽に水を汲みに出たが戻ることが出来ず、近くの川へ飛込んでしまった。三月一〇日ごろは水も冷たく、ともすれば手足の自由が効かなくなり呼吸も止りそうになったが、夜が明けるとまで川の中で首まで水に漬かっていた。引潮で、国防服にゲートルを巻いた死体がいくつも流れて来たり、焼トタンが気流上昇して風のように舞上った。

川に飛込む前に顔と両手に火傷を負い水疱になり、防空壕内で家内と子供三人が犠牲になっていることが解かっていた。もうどうにもならない。夜明けとともに川から這い上り、豊州の工場に辿り着いたのが不思議な位でした。このまま川で死んだら家内や子供たちも無縁仏になってしまうと思い、なんとしても生きて救いを求めなければと必死の思いで会社へ辿り着いた。会社では、先輩や後輩が着替えさせてくれて、防空壕に残っていた家内と子供三人の遺体を茶毘に付して、遺骨を一つの箱に納めてくれました。自分の顔が目が見えなくなる程水疱になり、手も箸(はし)を持つことが出来なくなり、付き添ってくれた養成工にごはんを食べさせて頂く。一度に一〇人以上も会社関係の負傷者が出たので病院に収容出来ず、外にゴザを敷いて並べられ看護婦さんも一人か二人しかおら

ず、薬もなければ治療も養生も出来ない状態だった。

空襲はますます烈しくなり、その都度月島小学校や深川第三商業学校へ担架で移動させられ、生きた心地はしなかった。三月二八日ごろ生家の兄が迎えに来てくれて、先輩諸君の手配してくれたりヤカーで、四人分の遺骨と一緒に上野駅まで送って頂き、避難列車でふるさと秋田県本荘駅へ疎開しました。あのころ町には医者もおらず(応召中)、病院に看護婦もいなければ薬も無く入院することも出来ません。僅かばかり配給になった食用油を持ち寄ってくれて治療薬に使ったのです。とにかく、あの惨劇は筆舌では表現出来ない地獄でした。

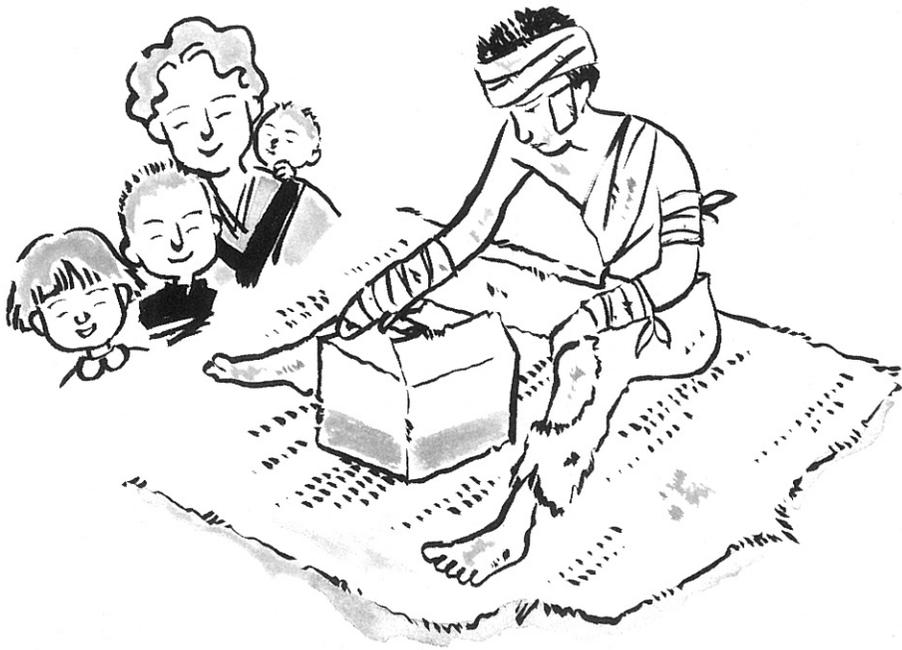
昭和二〇年六月ごろ簡閲点呼令状が届き、目黒の小学校まで出頭せよとのこと。出頭しないと後が恐ろしいので、重傷ながら秋田から点呼へ辿り着く。あのころの執行官(下士官)は狂気じみており、戦地ではもつと重い負傷者でもお国のために戦っている。その程度なら軽いと怒鳴られたことは今でも忘れません。点呼が終わって知人の家にご厄介になり、初めて焼跡に行つて見て驚いた。焼け残ったものは何一つなく、ガラスビンなどアメのようになっている。防空壕も無残な姿で残っており、悲しみと憤りがこみ上げてくる。

傷も少しずつ癒えてきて生き残つて見ると、無性に悲しく淋しくなり、この世から消え去った方が楽かと思つた事も幾度もありました。でも自分だけでなく他に大勢の方々が災害を蒙(うむ)っているのだと思い、家内や子供を救つてやる事が出来なかつた責任、無縁仏にしてはならない、仏を守ることが

生き残された者の義務と思い直し、八月一五日の終戦の詔勅を聞き、生きる道を考えさせられた。もともと内臓疾患でなく外傷だから傷も次第に癒え、生きて行く以上はいくら生家でも厄介になつてはいる訳にもゆかず、翌年九月、元居住したところのある北海道へ行く。以前親しくして頂いた家にご厄介になり、生き延びる手段を考えても、着のみ着のままでは何も出来ません。戦災に遭った時は貯金も当時のお金で七〇〇円程ありましたが、通帳も控え番号も全部焼失し払戻す方法も無く、国庫に納つたことになる。四〇歳にしてゼロからの再出発であり、昭和二二年樺太引揚者と家族構成し、昭和二六年再度上京して元の職場に採用して頂き、昭和四二年停年退職。その後下請会社で働き七〇歳になつて体力に限界を感じて退職、現在に至りました。

私も青年時代（大正一四年）は軍に憧れて海軍志願をしたこともありました。幸か不幸か不合格になりました。終戦後は自分の人生を滅茶滅茶にされた軍部を怨む気持ちは忘れ去ることは出来ません。奇しくも元軍用地に居住することになったのも、軍が解体されたお蔭かも知れません。現住地は元中野電信隊の演習地で、戦前は雑草生い茂る原野でした。今でも隣との境界に陸軍用地の標石が残っている。

戦災当時書き残したものは何も無く、当時の記憶を辿つて思い出して書いて見ました。



私が太平洋戦争で体験したこと

●下高井戸一丁目

荒川 宣章

(昭和六年生まれ)

ヒュル、ヒュル、ヒュル、雨あられのように降りそそぐ無数の焼夷爆弾、その時、私は一瞬死の恐怖を感じた。

昭和二〇年五月二五日、杉並区下高井戸一―九一―一（当時同一―一七）、今のこの地で体験した東京大空襲の日のことである。

甲州街道に面して建っていた私の家は、国の道路拡張策に沿って強制的に取りこわしを命じられ、後退して建て替えたばかりであった。

中学二年になって間もない私は、満足に学校にも登校できない戦況下で、いつ爆撃されるか分からない不安の日々を送っていた。戦局は次第に悪化の一途を辿り、もはや敗戦は目に見えていた。東京は連日のように無気味なサイレンが鳴り渡り、落ちつかない日が続いた。テレビが無かった当時としては、ラジオが唯一の通報機関であった。枕元には、通常、いつでも避難できるように綿の入った防空頭巾を置き、服を着たまま寝た。夜間は電球の光が洩れて標的にされないように布で覆った。こんな日常生活を送るなかで、五月二五日は

寝入りばなを起こされた。

アメリカ軍のB29は、遙かグアム島、サイパン島から飛来し執拗に波状攻撃を繰り返し、多くは、伊豆半島から富士山を目指し、東京に入るコースがとられた。今でも「東部軍管区情報、空襲警報発令、敵B29〇〇機は、伊豆半島附近を北上中……」などと告げるラジオ放送が鮮明に思い出される。

東京では、五月二五日以前にも三月一〇日や四月一三日など何回かの大空襲があつて、大きな被害を受けていた。そのたびに焼かれた方角が赤く夜空を染めて恐ろしかった。この日もまたかと思いつつ、それでもまだまだ遠い他の所のこのように思っていたが、この日、目の当たりに体験した惨状から様相は一変した。

私と父、母、姉、弟に妹二人の一家七人がその日いつものように避難の準備だけはしていた。素掘りの防空壕がどこの家庭にもあつたが、爆弾で生き埋めになる恐れがあつたので、家の出入口に待機していた。東の空（都心の方向）が真赤に染まっている様子をこわこわ見ていた。そのうち次第に至近

の場所に火の手が挙がるようになった。これは近いぞ、と突然、何が何だか分からないうちに、その恐怖が現実となって、目の前で起きた。

二階建ての屋根を突き抜けて直撃弾を受けたのだ。その時は、懸命に足を踏ん張って体を支えた。幼い弟や妹たちは、腰が抜けてどうしても一人では起き上がれない。私が手を添えてようやく立った。私は焼夷爆弾が落ちた所から少し離れていたの、直ぐに立ち上がることができたが、姉は顔を火傷した。被っていた防空頭巾に次々に火の手があがった。夢中で火のついた頭巾をとって捨てた。直ぐに外に出た。あらかじめ持っていた配給切符などの書類や手荷物をリヤカーに積んで、火勢と反対の桜上水の方向に、あてもないまま逃げた。

行き着いた所は、京王線の車庫の辺りだろうか。爆撃が治まってから夜の明けるまでそこにいた。甲州街道の歩道筋には待避壕が掘られていたが、皮肉にも通行のじやまになって逃げまどう人たちがゴッタ返した。逃げまどう人同士でケンカさえ起きていた。振り返りながら、自分たちが先程まで住んでいた家が焼け落ちるのを見て、どうすることも出来ず、子供ながら涙があふれたのを覚えている。

朝が来て、再び我が家に戻ったときの空しさ、何もかもが燃え尽きた。ただ呆然とするばかりであった。しかも隣の家から西側は、軒並み焼失の難を免れたではないか、何と不公平な仕打ちなのだろうか。焼かれた家と免かれた家に明暗を

分けるなんて……。

整理する気にもなれず、立ちつくすだけだった。買ってしまったばかりの分厚い漢和辞典が無残にも中程だけを残してくすぶっていた。何とも悔しかった。そして一家が文字通り着のみ着のままになった。よく生き残ったと今でも思う。向かいのTさんのお姉さんは、全身火傷がもとでとうとう亡くなった。

この日を境に、裸になった私たち家族は、母の実家があった浜田山(当時下高井戸四丁目)に世話になることになった。辛うじて梅雨どきの雨露を凌ぐことが出来た。母の実家は、農家であって、祖母も健在であったので、何とか世話になることが出来たが、あくまでも一時避難であった。それから一か月余り、私はここから井の頭線で学校に通うことになった。神泉のトンネル内では、電車がストップし、いつ動き出すか分からないトンネルの中を不安に思いながら歩いて帰ったことがあった。

私は、その後、親せきの好意で、栃木県葛生町(当時常盤村)に疎開し、住み馴れた東京を後にした。関東平野が尽きるこの辺りは遙か南の方向に東京が望める所で、空襲の恐ろしさはなくなったものの交通事情は極端に悪かった。バスはなく歩くのが一番確実な連絡方法であった。父が時折東京に帰り、食糧(主にさつまいもとかぼちゃ)を背負って戻って来たが、時刻などまるであてにならなかった。それでも家族全員が集まった時は、みんなの無事を確かめ合って嬉しかった。

た。

疎開した先は、農家の物置であった。都会と違って山の中で、蚊の襲撃に悩まされ、眠れない夜の連続であった。それでも家のない一家にとっては、まさに樂園に匹敵するものだった。私はここから佐野市の中学に編入し、自転車と座席のない電車乗り継いで学校まで通った。しかし、学校に通った期間は、その間僅かで八月一五日の終戦を迎えた。陛下の玉音放送はこの山の中で聴いた。

戦争が終わって再び東京に戻った。零からの出発であった。戦争は悲惨だ。国は被災者に何もしてくれない、と当時怒りの思いがあった。物心両面の打撃は大きかった。立ち上りは当然戦災を受けない人より遅れた。戦争の恐ろしさを再び繰り返さないためにも、自らの体験を通して語り伝えて行きたい。



焼土に立って

●高円寺北二丁目

伊藤 茂雄

(大正一五年生まれ)

今の平和な日々が嘘のような戦いの日々の明け暮れ、それでも木々の新緑の葉が茂り、その緑が目にしみる昭和二〇年五月二五日、警戒警報が空襲警報に変わる間もなく、夜九時ごろからB29爆撃機編隊の烈しい空襲が始まった。その日の夕方、一度警報が解除されて、やれやれと、それでもいつものように枕元に鉄兜・ゲートル・上着等習慣で揃え、ズボンをはいたまま床に入った。その途端であった。後に聞いた話では現在馬橋小学校の区域にあった当時の陸軍気象部をねらったものが、風によって流され高円寺駅北口周辺に落下したという。低空で進入した敵はサーチライトで機影がはっきり見え、その大きさに驚嘆した。そしてまるで線香花火を空にバラまくように、小さな炎を吹きながら落下する焼夷弾、その美しさにしばし見とれる、やがてばらばらに落下するものは、あちらこちらで消火されたようであった。とその時、空気を引き裂くような「ゴー」とも「ザー」とも何とも形容出来ない爆弾の落下音、間違いなく至近距離である。私は思わず隣の三菱銀行高円寺支店の建物の円柱の陰に身を伏せ、

頭をかかえてしまった。「ズツン」と腹に響くような着弾の音、しかし爆発音がしない。恐る恐る頭を持ち上げると、学生服の袖に、アルミのとけたような破片がへばりついている。警戒団員が、現在の不二家高円寺店（当時は丸高ストアといった。）その所の二階に被弾「早く、消火を」と騒いでいる。我が家の真ん前である。しかし警戒団員が大勢でもって来たものは、江戸時代の火消しが使用したのと同じ、当時竜吐水と呼ばれていた、シーソースタイルのぎったんばつたんと四人で水を押し上げ押し下げする、水鉄砲の親方みたいなポンプであった。それに皆でバケツリレーして、真中の四角いタンクに水を汲み入れる物、と言えば大よそ想像がつくであろうが、こんなもので消火出来るわけがない。しかし当時は必死でギッタンバッタンを交替で行った。この時、落下した焼夷弾は、モロトフのパン籠と称するものなぞで、その構造は縦の長さ約一メートル八〇センチ位、太さ直径七〇センチ位の八角形のような形状だっただけだ。左右に扉が開き、中はそれ

ぞれ三段になり一段に確か一二発位、合計片側三六発、両方で七二発がつめられ、落下する時、両扉が開かれバラバラに落下するものであった。しかしここに落下したものは、その片側が開かず三六発が、そのまま、容器ごと落下したのである。着弾したと同時に三六発が一度に火を吹き出したのだから、なまはんかな消火器を持って来ても消火出来るわけがない。当時商店は品物、日用品は全部配給キップ制で売る物がない、そのため丸高ストアは一階は銀行に貸し、二階に陳列ケースや売り台を天井近くまで積み上げ、休業中。しかも二階に上る一階正面の階段を取りはずしてあったから、二階に上る事が出来ない。二階は燃えほうだい。二階の窓から炎が吹き出すのに、五分とかからなかった。防火用水の水を頭から何杯もかぶるのだが、猛火と熱気の強さで、アツという間に乾いてしまう。目の廻り、手首、皮膚の露出している所が火傷で、火ぶくれになるがかまっていられない。父は警防団員として既に出動中。我が家の二階の軒先に火が入った。ぐずぐず出来ない。直ぐに母と妹、弟をリヤカーに夜具等を積めるだけ積み、先の四月一三日の空襲で既に一面の焼土となつている高円寺の南口に避難するよう指示し、消火に励むが、火勢が強すぎて正面に近寄れない。裏からと、台所より入ると、店のガラスの陳列ケースの上を、蛇の舌のような火が生きもののようにチョロチョロはっている。煙は一杯で息苦しい。台所にあつた翌日の米がといで釜に入れてあつたのを持ち出す。五〇メートル程離れた本家の庭まで運び、引き

返す。未だ店だけ火につつまれているが、裏は大丈夫と自分を励ましながら台所から再び入る。もう煙が立ちこめ苦しいばかりか、中が見えない。手拭で口の廻りを巻いて、手ざわりで足踏みのミシンを探りあて、かかえあげ再び本家の庭まで持込む。そしてこれが最後であった。二度と我が家に入る事は出来なかった。

やがて火は風を呼び、風は火を呼んで、紅蓮の炎の大波となつて地表をなめ、その先にあるものをベリベリ轟音を立てながら焼きつくす。これではせっかく持ち出した物が焼けてしまふと庭に穴を掘つてそれ等を埋め、空を仰いだ時、雨のような烈しい水しぶきがかかる。当時の私の家の本家は一八代目伊藤の森と呼ばれ、今の阿佐ヶ谷北口にあるA邸と同じように庭の廻りには樹齡何百年という櫻や、杉の大本が何本もあり、高さは三〇メートルを越す物ばかりで、また庭の広さは、三〇〇坪とも五〇〇坪ともいわれ、鬱蒼と木々が繁り、ここに避難すれば、まず安全といわれていたが、紅蓮のその炎がそれ等の大木の梢にまで届くや、一瞬の内に前述したごとく、新緑の葉から水を吹き出し、「あつ」という間に「チリチリ」になり、それがガソリンに引火するように次から次へと燃え移り、たちまちの内に枯木になつたのであつた。この火力はその後高円寺北口付近を五、六〇メートルの幅で斜めに炎の火線となつて北へ向かい、現在の環状七号線の向こう側野方二丁目附近まで焼きつくしたのである。翌日廢墟に杲然と立ち尽くす母の顔を、私は正視出来なかった。

昭和二〇年三月四日の被爆体験記

●下井草三丁目

井上 正治

(大正一〇年生まれ)

朝から、雲が低く垂れ込めた寒い朝だった。午前九時ごろ、空襲警報が発令された。いつもは防空壕に入らなかつた私ですが、この日に限って母に続いて防空壕に入る。間もなく西から都心に向けて行くはずのB29の爆音が今日は北側（練馬方面）から近づく。雲のため飛行機の姿は全く見えなかつた。爆音が近づくとともに、爆弾の落下音（空気を切るザーという音）が頭上に迫る。次の瞬間、地面を揺がす大振動が起こった。夢中になって体を、地面に伏せる。……気がつくとも母は一生懸命に『南無阿弥陀仏』を、繰返していた。間もなくあたりが静かになったので防空壕から出て見ると土埃の臭が鼻をついた。家は爆風のため南側に傾斜し、窓ガラスは全部破壊し、土砂で家の中が泥だらけになっている。家の裏側で人の声があるので垣根越しに見ると、一〇メートル位離れた北側のN家が完全に吹き飛ばされ跡形もなく、直径五〇メートル、深さ五メートル位の大穴が開いており、警防団の人たちが黙々と、死体の収容と整地に当たっていた。死者は六人でN家は全員即死でした。死体の中、一体はT家の玄關

前に落ち、もう一体はY家の屋根を貫いて座敷に落下した。Y家の夫人は気丈な人で「かわいそうに」といいながら死体の始末をする。死体は現在の下井草消防署筋向かいの角に集められ納棺された。その中に誰かが「向井草の高射砲が妙正寺川に落ちているぞ」と怒鳴りながら走り去って行った。戦後の調査によると、高射砲陣地は爆弾一発の直撃を受け戦死一名、負傷者五名の被害をうけた。間もなく雪が降り出して、あたりが静かになってきた。自宅内外の異常を点検していると、廊下の天井裏の横棧が折れて垂れ下がっていた。当日は降雪のため翌日（三月五日）に梯子をかけて、雪を除いて見ると赤ん坊の頭位の赤土の塊が出て来た。爆風により飛散したもので、もし直撃を受けていれば死亡するところであった。別に北側の屋根に直径五センチ位の内臓が乗っていた。早速警防団長のS氏に知らせたところ、日頃は威勢の良かった同氏は頭を横に振るばかりで引き下がってしまった。N家の親類に知らせ、引きとって貰った。屋根の破損箇所は杉並区の方で早速修理してくれたが、三月一〇日の本所・深川の上空

襲の前だったので、未だ余裕があったのであろう。

爆弾の落下音

下井草附近の空襲は昭和一九年一月が初めて、その時にM家の敷地内に不発弾が落下した音を母は聞いていたので、三月四日の時も爆弾の落下音をすぐ聞きわけて、私に注意したという。私も被爆で落下音を体験したので、戦後松林を切りたおす際の木が倒れる音に、反射的に首をちぢめた経験がある。

向井草高射砲陣地

東京防空の一環として戦時中に建設されたもので、編成上は第一一六連隊、第二大隊に属し、第八中隊が駐在した。第八中隊は高射砲六門で編成され、直撃を受けた高射砲は第四分隊所属で、分隊長M伍長は当日休暇で難を逃れたが、被害は戦死一名戦傷五・六名である。B 29の飛行高度は一万二〇〇メートルなので、高性能の向井草陣地が爆撃を受けたと聞いていたが、実際には久我山陣地が対B 29用の新鋭高射砲であったと聞く。

杉並区人口推移

| 区分 | | 世帯数 | 男 | 女 | 計 |
|--------|----------|--------|---------|---------|---------|
| 調査年別 | | | | | |
| 昭和5年 | 国勢調査 | 29,354 | 68,842 | 65,687 | 134,529 |
| 〃 10 〃 | 〃 | 39,138 | 95,488 | 94,729 | 190,217 |
| 〃 15 〃 | 〃 | 50,549 | 123,600 | 121,835 | 245,435 |
| 〃 21 〃 | 〃 | 65,572 | 127,846 | 127,911 | 255,757 |
| 〃 22 〃 | 臨時 〃 | 70,978 | 141,869 | 136,092 | 277,961 |
| 〃 23 〃 | 常住人口 〃 | 75,736 | 150,569 | 147,483 | 298,052 |
| 〃 25 〃 | | 84,614 | 160,228 | 158,535 | 318,763 |
| 〃 27 〃 | [1月1日現在] | 90,856 | 178,285 | 175,189 | 353,474 |

注) 昭和25年度および27年度『杉並区勢概要』より作製。

〈「杉並区教育史 下巻」より〉